公立豊岡病院紀要

第 36 号　2024

BULLETIN OF TOYOOKA HOSPITAL

No.36

令和 7 年 3 月 31 日

公　立　豊　岡　病　院

豊　病　紀　要

BULL. TOYOOKA HOSP.

巻 頭 言

公立豊岡病院紀要第 36 号の発刊にあたって

2024 年は、物価高が続き、私たちの生活にさまざまな影響を与えました。特に、食品やエネルギーの価格上昇は家計に負担をかける一方で、私たちの医療現場にもその影響が及んでいます。それでも、病院全体が一丸となり、この困難な時期を乗り越えようと日々奮闘しております。当院でも、物価高の影響を最小限に抑えるため、効率的な運営と日々進化する AI 等デジタル技術を活用し、人的資源等の有効活用を進めてまいります。また、少子高齢化が進む中、医療の質とアクセスの問題が一層深刻化しています。特に地方における医師不足や医療資源の偏在は、依然として大きな課題であり、地域医療の強化が急務となっています。この課題に対しても、デジタル技術の活用やチーム医療の推進が一つの解決策となり得ます。引き続き、職員一丸となって、地域の皆さまの健康と生命を守り続けられるよう取り組んで参る所存です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

さて、この度、公立豊岡病院紀要第 36 号を発刊する運びとなりました。本号は、研究論文や研修報告、その他各種研究業績の報告等を多数掲載し充実した内容となっています。多くの職員が学会に参加し、日々の診療成果を報告していただいております。職員の皆さんの学ぶ姿勢は変わらず力強いものだと改めて感心致しました。今回執筆いただいた報告をきっかけに、それぞれの分野のより専門性の高い学術誌へ積極的に投稿・発表していただくことを期待しております。

当院は但馬地域唯一の高度専門医療が提供できる基幹病院として、良質な医療を提供するという使命を果たすために、今後も皆様と一緒に歩んでいきたいと思います。皆様のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、執筆頂いた職員の皆さま、ご多忙の中、第 36 号の発刊に向けご尽力頂いた編集委員の皆さまに心より感謝申し上げます。

令和７年３月

公立豊岡病院長
三輪　聡一

目　　次

巻頭言　　病院長　　三輪 聡一

研究論文

長期留置した子宮内避妊器具抜去時の子宮穿孔から生じた慢性化膿性肉芽腫症に対して腹腔鏡手術を施行した一例　　産婦人科　　伊田昂平　他　　1

研究業績

他誌掲載論文　　6

学会他発表　　11

講演　　17

資料

公立豊岡病院紀要投稿規定　　19

公立豊岡病院紀要論文執筆要領　　20

編集後記　　21

私たちの基本理念

公立豊岡病院は但馬地域の基幹病院として、高度かつ最適な医療を安定的に提供し、地域住民の健康と生命を守り続けます。

豊岡病院の基本方針

1. 生命の尊厳と人権を尊重し、患者に寄り添う医療を提供します。

2. 診療科や職種の枠を超えた連携によるチーム医療を推進します。

3. 24 時間体制で最適な医療を提供します。

4. 医療安全を重視する組織文化を定着させ、安全･安心な医療を提供します。

5. 地域の医療･保健･福祉機関との相互連携を推進します。

6. 職員一人ひとりが、自覚をもって経営の健全化に努めます。

7. 医療水準向上を目的に、職員の研修･教育の充実を図ります。

研 究 論 文

長期留置した子宮内避妊器具抜去時の子宮穿孔から生じた

慢性化膿性肉芽腫症に対して腹腔鏡手術を施行した一例

公立豊岡病院組合立 豊岡病院 産婦人科

伊田昂平，矢倉百花，上田三郎，坂部晃平，山形知央
小山御咲，田中美柚，中村昌平，松本典子，松原慕慶[4)]

要旨

【緒言】子宮内避妊器具(IUD)の長期留置は，放線菌症による帯下異常や腹膜炎を引き起こし，時には手術加療が必要となる。今回，IUD 抜去を試みたが子宮穿孔を起こし，追加治療が遅くなったことにより手術加療が難渋した症例を経験した。

【症例】

症例は 74 歳，2 妊 2 産。アンピシリンのアレルギー歴あり。40 年ほど前に IUD を留置したが，その後婦人科の受診はなかった。X 年 1 月に膿性帯下，下腹部痛を主訴に当院を受診した。IUD による子宮内感染を疑い，同年 3 月に硬性鏡下での抜去を試みるも、手術時の頸管拡張で子宮穿孔となった。硬性鏡が子宮内腔に到達できず，抜去困難であり手術は中止した。直後に子宮全摘術を予定したが，同時期に乳癌の診断となったため，乳癌の治療を優先すべく経過観察とした。同年 8 月に発熱と下腹部痛の増強があり，当院救急科を受診した．造影 MRI 検査では子宮付属器領域に強い造影効果を認め、子宮内感染の増悪を疑う所見でありクリンダマイシンの投与を開始した。今後も症状が反復する可能性があることを考慮し，同年 10 月に腹腔鏡下子宮全摘術及び両側付属器切除術を予定した。腹腔内は子宮と小腸が広範囲に癒着しており，また左仙骨子宮靭帯と小腸の癒着が高度のため，子宮全摘術が困難であり子宮腟上部切断術に変更した。クリンダマイシンの内服を 2 週間継続したところ術後経過は良好であった。病理では，放線菌様の菌塊を含む膿瘍を認め，慢性化膿性肉芽腫症と判断した。現在術後 1 年経過するが，症状なく経過されている。

【考察】

子宮内感染を伴い，長期間留置している IUD を抜去する際は，慎重な操作が求められる。また子宮穿孔となった場合は，放線菌症による慢性化膿性肉芽腫症を形成する可能性があることを念頭におき，早期に手術を予定するのが望ましい。

索引用語 ： 子宮内避妊器具，放線菌，慢性化膿性肉芽腫症，腹腔鏡手術，子宮腟上部切断術

研 究 業 績

他 誌 掲 載 論 文

非結核性抗酸菌症に合併した類上皮血管内皮腫の１例

公立豊岡病院呼吸器内科 [1)]
国立病院機構姫路医療センター呼吸器内科 [2)]
国立病院機構姫路医療センター呼吸器外科 [3)]
国立病院機構姫路医療センター病理診断科 [4)]
三好琴子 [1)]，難波晃平 [1)]，高田悠司 [1)]，
中治仁志 [1)]，水守康之 [2)]，山田　徹 [3)]，
安松良子 [4)]

気管支学(0287-2137)45 巻 4 号
Page280-286(2023.07)

要旨

背景.肺類上皮血管内皮腫(pulmonary　epithelioid hemangioendothelioma：PEH) は，血管内皮細胞由来の比較的稀な悪性腫瘍である.症例.70 歳代,女性.他院で胸部 X 線異常を指摘され 2019 年 12 月紹介受診した．胸部 CT で右肺中葉 4mm 大の結節，右 B6 中枢側の気管支血管束肥厚，　S6 末梢に気道散布性粒状陰影を伴う多発結節を認めた．気管支鏡検査を行ったが生検，培養検体では有意な所見を認めず，経過観察とした．2020 年 9 月の CT では，右中葉結節は 6mm へ増大し，右 B6 気管支血管束肥厚は肺門リンパ節と一塊の結節様となり気管支を狭窄していた.この病変に対し気管支鏡にて直視下生検を行い非小細胞肺癌の組織診断を得て，さらに気管支洗浄液培養検査で Mycoha（r－terium　avium（M.・avium）を検出した．非結核性抗酸菌症（non－tuberculous mycobacterial　disease：NTM）と右 S6 非小細胞肺癌 cTlcNIMO　cStage　IIB との合併と考え，2020 年 11 月胸腔鏡下右肺中下葉切除を施行した.病理診断では S6 結節及び中葉結節は PEH であり，中下葉に多数の類上皮肉芽腫を認め抗酸菌感染の合併が示唆された．結論．肺 NTM 症と PEH の合併症例を経験したので報告した.

診断に難渋した新生児疥癬

公立豊岡病院　小児科
上田雅章

日本小児呼吸器学会雑誌(0001-6543)127 巻 5 号
Page714-719(2023.05)

要旨

初診時生後 1 ヵ月女児､全身の皮疹を主訴とした。頸部・体幹・四肢の紅斑性丘疹、四肢・足底の痂疲や膿疱を認め、乳児湿疹としてステロイドを外用するも症状は改善しなかった。その後、両側腋窩と鼠径部のリンパ節腫脹が出現し、皮膚病性リンパ節症と診断されたが、ステロイド治療に抵抗性であり、手掌･足底に出現した角化病変が体幹まで拡大した。ところが、生後 5 ヵ月時に鏡検でヒゼンダニ虫体と多数の虫卵が確認され、角化型疥癬の診断で治療を開始した。その結果、約 3 週間で角化病変は完全に消失し、皮膚症状の再燃は認めていない。本症例は新生児期に発症した通常疥癬に対してステロイド外用を継続した。その結果、角化型疥癬に移行したと考えられ、患児を感染源とした家族内での感染拡大が生じていた。ステロイド外用に抵抗性の湿疹では新生児でも疥癬を鑑別診断に挙げ、皮膚科医と連携して早期に診断・治療を行うことが重要である。

川崎病に対するシクロスポリンA併用治療の後方視的検討

公立豊岡病院　小児科
竹本崇之,山田博之,藤林洋美,上田雅章,
港敏則

小児科臨床(0021-518X)76 巻 4 号
Page565-570(2023.08)

要旨

川崎病に対するシクロスポリン A(CsA)併用治療の効果と問題点,地域中核病院における有用性を後方視的に検討した。対象は 2021 年 2 月から 2022 年 6 月に当院で急性期治療を行った川崎病症例で,Kobayashi スコア 5 点以上(高リスク例)には 1st line から,5 点未満(低リスク例)には 2nd line から

CsA併用を行った。高リスク例4例すべてで1st lineが奏効した。低リスク例12例中5例は2nd lineに移行し,2例が2nd lineに不応で,1例は3rd lineを要した。この症例は7ヵ月と最も低年齢で,CsAトラフ値が低く本検討で唯一冠動脈病変を形成した。CsA併用治療は,既報告と同様に高リスク例に対して有用で,重篤な副作用もなく地域中核病院でも実施可能な治療法である。一方,乳児での適切な血中濃度の管理には薬物動態を考慮し,更なる検討が必要である。

有熱時発作群発症例の管理方法の後方視的検討

公立豊岡病院　小児科
土肥周平, 山田博之,藤林洋美,上田雅章,
港敏則

脳と発達(0029-0831)56巻1号
Page33-38(2024.01))

要旨

【目的】有熱時発作群発症例の臨床的特徴や血液検査所見を調査し,その管理方法について検討する.【方法】対象は2011年から2021年に当院小児科に入院した有熱時発作群発症例でカルテを用いた後方視的検討を行った.てんかんや発作に関連する基礎疾患がある例,てんかん重積症例は除外した.発作群発回数別に,2回群発群(A群)と3回以上群発群(B群)に分けて検討した.調査項目は,年齢,既往歴,家族歴,入院期間,体温,発症時の血液検査,治療内容とした.【結果】症例は計223例で,A群169例,B群54例であった.退院時に診察上,神経学的異常所見を認めた症例はなかった.B群はA群と比較し,低年齢で入院期間が長く,血清ASTとALTは高値で血糖値は低かった($p<0.05$).Diazepam(DZP)坐薬を2回目発作後と3回目以降の発作後に投与した症例のうち,各々80%と90.9%でそれ以降の発作を認めなかったが,DZP坐薬使用の有無による3回目以降の発作抑制率に有意差はなかった.【結論】有熱時発作群発児の約1/4が3回以上の発作を繰り返した.血清AST,ALTによる発作群発予測は感度,特異度は低く更なる検討を要する.DZP坐薬使用による群発抑制効果も明確ではなかった.発作群発例の入院適応や治療は,病院へのアクセスや地域での医療資源,保護者の負担を踏まえた判断が必要と考える.

兵庫県但馬地域での熱性けいれんに対する指針作成の取り組み　医療機関へのアンケート調査を通して

公立豊岡病院　小児科
山田博之,春田真之介,江國哲,藤林洋美,
上田雅章,港敏則

兵庫県小児科医会報(1340-5055)80号
Page28-38(2023.)

要旨

【背景】熱性けいれんは頻度の高い疾患だが,医師により対応の方針が異なることがあり,病診連携時に患者や家族の不安や混乱につながることがある。【目的】兵庫県但馬地域における熱性けいれんへの対応やジアゼパム(DZP)坐剤の使用方法を明らかにし,本地域で小児の入院管理が可能な唯一の医療機関として熱性けいれん対応の指針を作成することを目的とした。【対象と方法】但馬地域(3市2町)の小児科医または小児科を標榜する医療機関に対して熱性けいれんに対するアンケート調査を実施した。アンケート内容は,回答者の背景と熱性けいれん診療ガイドライン2015の認知と活用の有無,熱性発作時の対応,DZP坐剤の使用方法とした。【結果】アンケート回答者は当院小児科医13人,診療所等勤務のその他医師9人で,回収率は全体で81.5%であった。日常臨床でガイドラインを参考にしている医師が大半だったが,「使用していない」2人,「知らない」が1人であった。単純型熱性けいれんへの対応では,来院時にDZP坐剤を「症例によっては使用する」または「使用する」と3人の医師が回答し,うち2人はDZP坐剤の予防投与も指導すると回答した。群発時の対応は全員が入院管理または高次医療機関へ搬送すると選択し,退院時の予防的DZP坐剤使用についてもほぼ全員が指導すると回答した。予防的DZP坐剤の適応について重視する項目では,医療機関へのアクセス,発症年齢,発作持続時間,既往歴,家族歴,家族因子(家族の要望)が比較的高率であった。予防的DZP坐剤の使用方法については,ガイドラインの推奨とほぼ同様であったが,1回投与量を0.2mg/kg以下とした医師が1人いた。またDZP坐剤を発作持続時に投与すると記載した医師が1人いた。【考察】調査結果から本地域ではガイドライン認知度とその臨床への活用は当院小児科医,その他医師ともに高く,熱性けいれんへの対応も両者間で大きな方針の違いはな

かった。方針は概ねガイドラインに記載の通りだったが,単純型熱性けいれんへの DZP 坐剤の使用方法や DZP 坐剤の投与量の違いについては再度情報共有していく必要があると考える。但馬地域は広範で地域的要因や家族要因なども含めて個々の症例ごとに対応を検討する必要はあるが,当科として熱性けいれんに対する一定の指針を作成した。今後は本地域の医療機関で共有する必要がある。

兵庫県但馬地域の医療的ケア児者の実態把握調査

公立豊岡病院　小児科
藤川陽介,山田博之,藤本将史,藤林洋美,
上田雅章, 港敏則

兵庫県小児科医会報(1340-5055)80 号
Page20-27(2023.)

要旨

【背景】医療的ケア児者は,近年全国的に増加している.2021 年には「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が施行され,地方公共団体や学校,保育所などは医療的ケア児者およびその家族に対する支援の拡充が責務となった.医療的ケア児者は基礎疾患や重症度さらに家族背景によって在宅での管理が多様なため,行政,福祉サービスを計画するためには,各地域で医療的ケア児者の実態把握に努める必要がある。【目的】兵庫県但馬地域の医療的ケア児者の実数把握とその社会的,臨床的特徴を調査することを目的とした。【対象と方法】2022 年 5 月末時点で公立豊岡病院組合立豊岡病院小児科に通院中の患者から,但馬地域に居住し「日常的に医療的ケアを要する患者」(医療的ケア児者)を抽出し,年齢,性別,両親同居の有無,居住地,基礎疾患,重症度を調査し,後方視的に検討した。【結果】医療的ケア児者の総数は 28 人(男性 16 人,女性 12 人)で,年齢は平均値 12±7.2 歳,中央値 12 歳(1～29 歳)で,豊岡市を中心に周辺市町に広く分布していた。家族構成は,3 人はひとり親家庭であった。基礎疾患は,先天性疾患が 13 人で,次に周産期障害が 7 人であった。医療的ケア内容は,気管切開管理は 10 人で,そのうち 6 人は気管切開下陽圧換気を実施していた。非侵襲的陽圧換気は 5 人,在宅酸素療法は 14 人,鼻腔・口腔・気管内吸引は 15 人,胃瘻は 9 人で実施していた。中心静脈栄養を要する患者は 1 人で,ストーマは 3 人であった。医療的ケア児者の重症度は,「重度心身障害児者」と「動けて話せる医療的ケア児者」が多く,動けて話せる医療的ケア児者 12 人中,約半数で気管切開管理や酸素療法,吸引,経管栄養を要していた。【結論】但馬地域には絶対数は少ないが全国規模とほぼ同じ割合で医療的ケア児者が存在することが判明した。広範な地域であり市町村単位での施策や医療福祉サービスの提供は困難なことが多く,より広域で連携を行い多種多様な医ケア児者がどの制度やサービスからも除外されないような取り組みが必要と考える。

心タンポナーデで発症した巨大左バルサルバ洞動脈瘤破裂例

公立豊岡病院　呼吸器・心臓血管外科
田中仁,那須通寛, 井内幹人

日本血管外科学会雑誌(0285-1474)52 巻 3 号
Page185-188(2023.5)

要旨

症例は 63 歳男性,突然の胸部圧迫感,四肢冷感を主訴として救急搬送された.既往歴として肺非定型抗酸菌症のため 11 年間の 3 剤併用療法(クリンダマイシン,リファンピシン,エタンブトール)を行っている.造影 CT で左バルサルバ洞は 5.8cm に拡大しており,経胸壁心エコーでは高度の大動脈弁逆流,心タンポナーデにより右心房･右心室が圧迫されていた.検査中に血行動態が不安定となり気管内挿管を行い,カテコラミン投与下に手術場へ緊急搬送した.右大腿動静脈バイパス下に胸骨正中切開し,心嚢を切開したところ心嚢内は暗赤色血液で充満していた.心停止下に上行大動脈を切開したところ左バルサルバ洞全体が大きく拡大しており,正常組織を認めず,瘤壁は肺動脈・左心房と固く癒着していた.左前下行枝・左回旋枝は個別に直接バルサルバ洞より起始しており,左主幹部は動脈瘤壁の一部となっているように考えられた.術後もリファンピシンを服用しなければならずワーファリンの作用を減じる可能性が高い.確実な逆流の制御が必要であり救命的措置手術であったため,自己弁温存手術よりは生体弁を用いた Bentall 手術を基本とすることにした.冠動脈再建は右冠動脈には Carrel patch 法を用い,左冠動

脈は左前下行枝,回旋枝にそれぞれ大伏在静脈を用いたバイパス術を行うこととした.末消側吻合はできるかぎり冠動脈の中枢側本幹にて行い,中枢側吻合部は人工血管に行った.出血制御のため 2 日間の delayed sternal closure とした.心機能に問題なく術後 33 日目に退院し,5 年目の現在外来にて 3 剤併用療法を継続しており経過観察中である.

当院における経尿道的尿管バルーン拡張術の有効性に関する検討

公立豊岡病院　泌尿器科
古倉和紀,渡部淳,宅間敬晃,横関仁志,
請田翔子,植村祐一,植垣正幸,
白波瀬敏明

臨床泌尿器科(0385-2393)77 巻 11 号
Page927-930(2023.10)

要旨

近年,尿管狭窄に対しさまざまな内視鏡治療が適応となっている.今回われわれは,2011 年 12 月から 2022 年 3 月までに尿管狭窄と診断した 22 例を対象とし,経尿道的尿管バルーン拡張(以下,バルーン拡張とする)術を施行しその有効性に関して検討を行った.22 例中 15 例(68.2%)で水腎症の改善を認め,15 例のうち 2 例は再度バルーン拡張を施行することで改善を認めた.尿管狭窄に対しバルーン拡張術を施行することは有効であると考えられた.

PCR-ribotype 027 株による Clostridioides difficile 感染症アウトブレイクの経験

公立豊岡病院感染管理室 [1)]
公立豊岡病院薬剤部 [2)]
公立豊岡病院検査技術科 [3)]
東京科学大学統合臨床感染症学分野 [4)]
国立国際医療研究センター病院
AMR 臨床リファレンスセンター[5)]
国立感染症研究所細菌第二部 [6)]
国立感染症研究所薬剤耐性研究センター[7)]
吉盛奈津美 [1)],藤本裕子 [1)],今井清隆 [2)],
一幡結 [2)],長谷川香織 [3)],具芳明 [4,5)],
妹尾充敏 [6)],加藤 はる [6,7)]

日本環境感染学会誌(1882-532X)38 巻 3 号
Page90-98(2023.05)

要旨

日本では,Clostridioides difficile PCR-ribotype 027(RT027)の分離率は低い.私たちは,日本の地域の中核病院で発生した RT027 によるアウトブレイクを経験したので報告する.2019 年 2 月から 6 月末までに,当院の一病棟(A 病棟)で 18 例の新しい C. difficile 感染症(CDI)患者が認められた.アウトブレイクがピークとなった 3 月の CDI 発生率は,69.9/10.000 patient-days であった.18 患者のうち,11 患者(12 エピソード)で菌株解析が可能であり 12 菌株すべてが RT027 と同定された.一方,A 病棟以外に入院した CDI 患者からは RT027 は分離されなかったことから,RT027 によるアウトブレイクは A 病棟に限局していたことが明らかとなった.基本的な感染対策の徹底により,7 月より A 病棟での CDI 発生率は減少し,同時に RT027 は分離されなくなった.調べた 12 株の RT027 株はすべてガチフロキサシンおよびモキシフロキサシンに感性であり,本アウトブレイク株は,欧米でアウトブレイク流行株 RT027 としては報告されてこなかった,フルオロキノロン感性 RT027 株であった.日本での,RT027 株の疫学や臨床的重要性については,今後の検討が必要である.

全身への疣腫塞栓を合併した非典型的疣腫を有する大動脈弁位感染性心内膜炎の 1 症例

公立豊岡病院検査技術科 [1)]
公立豊岡病院呼吸器・心臓血管外科 [2)]
宇野矢紀 [1)]，成田晃貴 [1)]，加藤早苗 [1)]，
吉野裕美 [1)]，竹中恵美 [1)]，舩田朋子 [1)]，
永田純子 [1)]，井内幹人 [1)]，田中仁 [2)]，
那須通寛 [2)]

超音波医学(1346-1176)51 巻 2 号
Page97-101(2024.03)

要旨

症例は 70 代男性.変形性腰椎症に対し硬膜外ブロック注射を 4 年前から月に 1 回定期施行していた.入院 2 日前から多発性関節痛と 38.0℃の発熱を認め受診,高度な炎症反応と全身 CT で右肩・右腸腰筋に膿瘍像,頭部 MRI で左前頭葉に梗塞像を認め感染性心内膜炎を疑い入院となった.入院当日と入院 2 日目の血液培養からメチシリン耐性黄色ブドウ球菌が検

出,その後の経胸壁心臓超音波検査で大動脈弁左室側に紐状の疣腫像と前壁中隔の壁運動低下を認めた.入院 3 日目に経食道心臓超音波検査で大動脈弁に疣腫像を認め感染性心内膜炎と確定診断,同日施行された冠動脈 CT では左前下行枝に疣腫によると思われる高度狭窄像を認めた.入院 4 日目に準緊急手術(大動脈弁置換術,冠動脈バイパス術)が施行された.肩・腸腰筋膿瘍を契機とした感染性心内膜炎に非典型的な疣腫による冠動脈塞栓,脳梗塞を合併した症例を経験したので報告する.

学　会　他　発　表

リウマチ性多発筋痛症様症状で発症し，診断に難渋した全身性エリテマトーデスの１例

公立豊岡病院　総合診療科
高田京加
第 14 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
2023 年５月 12 日～14 日　於：愛知県名古屋市

外国人技能実習生の全身性エリテマトーデス発症に対し，社会的サポートを要した１例

公立豊岡病院　総合診療科
新野花，板垣実幸，高田京加，迫健太郎，
見坂恒明
第 14 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
2023 年５月 12 日～14 日　於：愛知県名古屋市

アレルギー性気管支肺真菌症の治療中に非結核性抗酸菌症と診断した一例

公立豊岡病院　呼吸器内科
辻本晶紀，藤本佑樹，塚本信哉，
三好琴子，中治仁志
第 101 回日本呼吸器学会近畿地方会
2023 年 7 月 22 日　於：兵庫県神戸市

急速に進行するランダムパターンのびまん性粒状影を呈した膵癌多発肺転移の１例

公立豊岡病院　呼吸器内科 [1)]
公立豊岡病院　消化器科 [2)]
公立豊岡病院　病理診断科 [3)]
塚本信哉 [1)]，藤本佑樹 [1)]，三好琴子 [1)]，
原田威徳 [2)]，中島直樹 [3)]，中治仁志 [1)]
第 101 回日本呼吸器学会近畿地方会
2023 年 7 月 22 日　於：兵庫県神戸市

肺腺癌術後アテゾリズマブ単剤療法中に後腹膜線維症の再燃と薬剤性肺障害とを併発した１例

公立豊岡病院　呼吸器内科 [1)]
公立豊岡病院　泌尿器科 [2)]
公立豊岡病院　病理診断科 [3)]
藤本佑樹 [1)]，三好琴子 [1)]，塚本信哉 [1)]，
中治仁志 [1)]，植垣正幸 [2)]，中島直樹 [3)]
第 101 回日本呼吸器学会近畿地方会
2023 年 7 月 22 日　於：兵庫県神戸市

前立腺癌治療中に局所麻酔下胸腔鏡にて診断した悪性胸膜中皮腫の一例

公立豊岡病院　呼吸器内科 [1)]
公立豊岡病院　病理診断科 [2)]
中村真由子 [1)]，三好琴子 [1)]，今尾舞 [1)]，
金澤史朗 [1)]，中治仁志 [1)]，中島直樹 [2)]
第 102 回日本呼吸器学会近畿地方会
2024 年 1 月 20 日　於：大阪府大阪市

餅誤嚥による気管支閉塞に対してクライオプローブを用いた気管支異物除去が有効であった１例

公立豊岡病院　呼吸器内科 [1)]
国立病院機構姫路医療センター呼吸器内科 [2)]
金澤史朗 [1)]，今尾舞 [1)]，三好琴子 [1)]，
中治仁志 [1)]，水守康之 [2)]
第 114 回日本呼吸器内視鏡学会近畿支部会
2024 年 2 月 3 日　於：大阪府大阪市

内視鏡的粘膜下層切除術を行った限局性胃アミロイドーシスの検討

公立豊岡病院　消化器科
宮垣亜紀，浅田友啓，原田威徳，竹中淳雄，
山田貴裕，木村利幸
第 119 回日本消化器病学会近畿支部例会
2024 年 1 月 20 日　於：京都府京都市

ダサチニブ誘発性大腸炎の内視鏡所見

公立豊岡病院　消化器科

浅田友啓,宮垣亜紀,原田威徳,竹中淳雄,
山田貴裕,木村利幸

第 119 回日本消化器病学会近畿支部例会

2024 年 1 月 20 日　於：京都府京都市

緊張病性昏迷を呈した頭部外傷歴を有する統合失調症患者に ECT を施行した一例

公立豊岡病院　精神科 [1)]

関西青少年サナトリューム医局 [2)]

京都大学医学部附属病院 [3)]

石橋拓実 [1)]，岡本敦子 [2)]，諏訪太朗 [3)]

第 119 回日本精神神経学会学術総会

2023 年６月 22 日～24 日　於：神奈川県横浜市

兵庫県北部地域における RS ウイルス感染症の実態把握調査

公立豊岡病院　小児科 [1)]

社会医療法人愛仁会高槻病院 [2)]

藤川陽介 [1)]，杉村竜太郎 [1)]，
春田真之介 [1)]，西澤和輝 [2)]，末宗和樹 [1)]，
竹本崇之 [1)]，山田博之 [1)]，藤林洋美 [1)]，
上田雅章 [1)]，港敏則 [1)]

第 55 回日本小児呼吸器学会

2023 年 10 月 7 日～8 日　於：兵庫県豊岡市

当院での小児 MRI 検査における静注鎮静薬の実態調査

公立豊岡病院　小児科

杉村竜太郎，山田博之，春田真之介，
藤林洋美，上田雅章，港　敏則

第 55 回日本小児呼吸器学会

2023 年 10 月 7 日～8 日　於：兵庫県豊岡市

在宅人工呼吸器導入直後に気管カニューレの事故抜去を認めた先天性声門下狭窄の 2 か月男児例

公立豊岡病院　小児科 [1)]

姫路赤十字病院小児外科 [2)]

春田真之介 [1)]，山田博之 [1)]，藤林洋美 [1)]，
上田雅章 [1)]，福澤宏明 [2)]，港敏則 [1)]

第 55 回日本小児呼吸器学会

2023 年 10 月 7 日～8 日　於：兵庫県豊岡市

性的虐待を考慮しつつ診療した性器ヘルペスの３歳女児例

公立豊岡病院　小児科

藤本将史

第 289 回日本小児科学会兵庫

2023 年 5 月 20 日　於：兵庫県神戸市

入院加療を要した単純型熱性発作の検討

公立豊岡病院　小児科

杉村竜太郎

第 290 回日本小児科学会兵庫

2023 年９月 23 日　於：Web

公立豊岡病院小児科における他施設への転院搬送症例の後方視的検討

公立豊岡病院　小児科

末宗和樹

第 290 回日本小児科学会兵庫

2023 年９月 23 日　於：Web

蛍光クリップが切離ライン決定に有効であったロボット支援下幽門温存胃切除術の一例

公立豊岡病院　外科

岡本 拓也

第 36 回日本内視鏡外科学会総会

2023 年 12 月 7 日～９日　於：神奈川県横浜市

長期にわたり内分泌治療が奏効した乳癌胃転移の 1 例

公立豊岡病院　乳腺外科 [1)]
公立豊岡病院　外科 [2)]
公立豊岡病院　看護部 [3)]
杉本尭 [1)], 水田誠 [1)], 福井由紀子 [1)],
遠藤真一郎 [1)], 坪野充彦 [2)], 坪野ますみ [3)]
第 31 回日本乳癌学会学術総会
2023 年６月 29 日～７月１日　於：神奈川県横浜市

大動脈径増大を認めた Stanford B 型急性大動脈解離に対し、VIABAHN VBX を用いた腹部分枝リエントリー閉鎖を併施した TEVAR の１例

公立豊岡病院　心臓血管外科
井内幹人, 香西英孝, 仲井健朗, 平野竜史,
田中仁, 那須通寛
第 64 回日本脈管学会学術総会
2023 年 10 月 26 日～28 日　於：神奈川県横浜市

腹膜播種を伴う膀胱癌に対して化学療法を実施した後に卵巣癌を認め重複癌の診断に至った一例

公立豊岡病院　産婦人科
信正智輝, 山岡侑介, 伊田昂平, 佐藤晋平,
大月美輝, 松原慕慶
第 65 回日本婦人科腫瘍学会学術講演会
2023 年７月 14 日～16 日　於：島根県松江市

当院における腹腔鏡下根治的前立腺全摘除術の手術成績について

公立豊岡病院　泌尿器科
古倉和紀, 渡部淳, 宅間敬晃, 横関仁志,
請田翔子, 植村祐一, 白波瀬敏明
第 75 回西日本泌尿器科学会総会
2023 年 10 月２日～５日　於：愛媛県松山市

当院におけるロボット支援腹腔鏡下膀胱全摘除術（RARC）の初期経験

公立豊岡病院　泌尿器科
横関仁志, 宅間敬晃, 古倉和紀, 請田翔子,
植村祐一, 渡部淳
第 73 回日本泌尿器科学会中部総会
2023 年 10 月 12 日～14 日　於：奈良県奈良市

ドクターカーは脳梗塞急性期治療に貢献できるか

公立豊岡病院　救急集中治療科
番匠谷友紀, 徳田理奈, 松田知也,
間崇史, 菊川元博, 藤崎修, 松井大作,
永嶋太
第 51 回日本救急医学会総会・学術集会
2023 年 11 月 28 日～11 月 30 日　於：東京都文京区

救急医療現場における男女共同参画の推進はボス救急医としては極めて重要な使命である

公立豊岡病院　救急集中治療科
永嶋太
第 51 回日本救急医学会総会・学術集会
2023 年 11 月 28 日～11 月 30 日　於：東京都文京区

マムシ咬傷を機に破傷風を発症した１例

公立豊岡病院　救急集中治療科
徳田理奈, 濱本奈々, 番匠谷友紀,
松井大作, 永嶋太
第 51 回日本救急医学会総会・学術集会
2023 年 11 月 28 日～11 月 30 日　於：東京都文京区

ショックを伴う重症体幹部外傷に対しては Surgical approach を優先して行う

公立豊岡病院　救急集中治療科 [1)]
鳥取県立中央病院　救命救急センター [2)]
永嶋太 [1)], 番匠谷友紀 [1)], 菊川元博 [1)],
松田知也 [1)], 松井大作 [1)], 小林誠人 [2)]
第 37 回日本外傷学会総会・学術集会
2023 年６月１日～２日　於：愛知県名古屋市

プレホスピタルでターニケットは適切に使用されているか

公立豊岡病院　救急集中治療科

番匠谷友紀,松本大昌,松田知也,間崇史,菊川元博,永嶋太

第 37 回日本外傷学会総会・学術集会

2023 年６月１日～２日　於：愛知県名古屋市

外傷専門医をダブルボード可能なサブスペシャリティ領域に昇華させるべきである

公立豊岡病院　救急集中治療科

松田知也

第 37 回日本外傷学会総会・学術集会

2023 年６月１日～２日　於：愛知県名古屋市

当センターの指導的立場の 1st フライトドクターの資質を有した ACS 医の育成

公立豊岡病院　救急集中治療科

永嶋太

第 14 回日本 Acute Care Surgery 学会学術集会

2022 年９月 30 日～10 月１日　於：宮崎県宮崎市

当センターの重症外傷性膵損傷に対する治療戦略：PD を極力回避する Parenchyma sparing procedure を中心とした SEALANTS approach

公立豊岡病院　救急集中治療科

永嶋太

第 14 回日本 Acute Care Surgery 学会学術集会

2022 年９月 30 日～10 月１日　於：宮崎県宮崎市

パンデミックで分かった！ ACS 医は救急外来で働くべき

公立豊岡病院　救急集中治療科

高須惟人

第 14 回日本 Acute Care Surgery 学会学術集会

2022 年９月 30 日～10 月１日　於：宮崎県宮崎市

ACS 医に必要な Non-technical skill を学ぶ上で、救急科での修練には意味がある。

公立豊岡病院　救急集中治療科

菊川元博

第 14 回日本 Acute Care Surgery 学会学術集会

2022 年９月 30 日～10 月１日　於：宮崎県宮崎市

術前の CT 評価が行えずに緊急手術となった頸部杙創の一例

公立豊岡病院　救急集中治療科

松本大昌

第 14 回日本 Acute Care Surgery 学会学術集会

2022 年９月 30 日～10 月１日　於：宮崎県宮崎市

重症体幹部外傷の真髄を極めるためのベストプラクティス

公立豊岡病院　救急集中治療科

永嶋太

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年３月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

当センターにおける腹部救急疾患に対する各大動脈遮断法の検討

公立豊岡病院　救急集中治療科

永嶋太

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年３月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

ERCP 後の後腹膜穿孔～ Planed Staged Surgery Strategy ～

公立豊岡病院　救急集中治療科

菊川　元博

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年３月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

当院における消化管関連急性腹症における PMX-DHP の有効性の検討

公立豊岡病院　救急集中治療科

松田　知也

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年 3 月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

但馬流病院前診療の真髄 ～ Speed and accuracy are our priority ～

公立豊岡病院　救急集中治療科

松田　知也

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年 3 月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

ショックを呈した壊死性膵炎による WON に対し DCS による開腹ドレナージと段階的ネクロゼクトミーが有効であった 1 例

公立豊岡病院　救急集中治療科

佐々木啓太

第 60 回日本腹部救急医学会総会

2024 年 3 月 21 日～22 日　於：福岡県北九州市

当院における下部消化管関連急性腹症における PMX-DHP の有効性の検討

公立豊岡病院　救急集中治療科

松田知也, 永嶋太, 塚本光政, 佐々木啓太, 間崇史, 菊川元博, 番匠谷友紀

第 51 回日本集中治療医学会学術集会

2024 年 3 月 14 日～16 日　於：北海道札幌市

災害時におけるドクターヘリ本部統括業務の訓練の必要性

公立豊岡病院　救急集中治療科

永嶋太, 松井大作, 藤崎修, 間崇史

第 29 回日本災害医学会総会・学術集会

2024 年 2 月 22 日～24 日　於：京都府京都市

術前感染症検査の当院の現状

公立豊岡病院　ICT

吉盛奈津美, 藤本裕子, 今井清隆, 小川結, 上田拓, 長谷川香織, 後藤孝文, 田口慎一郎, 三木明

第 53 回(2022 年度)日本看護学会学術集会

2023 年 12 月 15 日～16 日　於：福岡県北九州市

ICLS コース受講による臨床効果の検証
～心停止時初期対応の時間を比較して～

公立豊岡病院　看護部

江副明佳, 濱武

第 26 回日本臨床救急医学会総会・学術集会

2023 年 7 月 27 日～29 日　於：東京都板橋区

さまざまな問題を抱えた在宅呼吸管理症例における外来看護師の役割

公立豊岡病院　看護部 [1)]

公立豊岡病院　小児科 [2)]

栂井弘美 [1)]，上田雅章 [2)]，港敏則 [2)]

第 55 回日本小児呼吸器学会

2023 年 10 月 7 日～8 日　於：兵庫県豊岡市

両側頸部壊死性筋膜炎術後に生じた組織欠損に対して ALT による再建術を行った一例

公立豊岡病院　歯科口腔外科

田中 太邦

第 68 回公益社団法人 日本口腔外科学会

2023 年 11 月 10 日～12 日　於：大阪府大阪市

精神科リエゾンチーム介入によって抗精神病薬が投与されたせん妄患者の退院時における処方状況の調査

公立豊岡病院　薬剤部 [1)]

公立豊岡病院　看護部 [2)]

河野拓人 [1)]，森本良武 [1)]，安原沙織 [2)]，辻井聡容 [1)]，中嶋正博 [1)]

第 45 回日本病院薬剤師会近畿学術大会

2024 年 1 月 27 日～28 日　於：和歌山県和歌山市

域連携で取り組む糖尿病に対する運動療法の継続支援

公立豊岡病院院リハビリテーション技術科
井垣 誠
第 66 回日本糖尿病学会年次学術集会
2023 年 5 月 11 日～13 日　於：鹿児島県鹿児島市

咳嗽反射がみられない重症心身障がい児に対する呼吸理学療法の介入

公立豊岡病院院リハビリテーション技術科 [1)]
公立豊岡病院院小児科 [2)]
小谷栄恵 [1)], 増田将也 [1)], 港敏則 [2)]
第 55 回日本小児呼吸器学会
2023 年 10 月 7 日～8 日　於：兵庫県豊岡市

CRRT における SNV-1.0 と CH-1.8W の回路寿命と回路開存率および各測定圧力の経時的変化の比較検討

公立豊岡病院　臨床工学技術科
尾田友広, 田原望羽, 片岡明俊, 谷口友基,
西田祐樹, 西本剛, 加藤航平, 上岡翔太,
田中慎二, 田中雅人, 後藤佳子, 栃尾孝之,
福井秀行
第 7 回日本集中治療医学会関西支部学術集会
2023 年 7 月 29 日　於：兵庫県神戸市

心臓血管外科周術期における腎代替療法(renal replacement therapy:RRT)

公立豊岡病院　臨床工学技術科
尾田友広
第 34 回日本急性血液浄化学会学術集会
2023 年 9 月 30 日～10 月 1 日　於：愛知県名古屋市

多職種連携による周産期メンタルヘルス支援システム―こうのとり子育て支援活動―

公立豊岡病院　看護部 [1)]
公立豊岡病院　医事企画課 [2)]
公立豊岡病院　精神科 [3)]
天理よろづ相談所病院　産婦人科 [4)]
公立豊岡病院　産婦人科 [5)]
安原沙織 [1)], 東森優子 [1)], 石田雅人 [2)],
田村大地 [2)], 最上新之輔 [2)], 三木寛隆 [3)],
住友理浩 [4)], 松原慕慶 [5)]
第 36 回日本総合病院精神医学会総会
2023 年 11 月 17 日～18 日　於：宮城県仙台市

クリニカルパス活性化に向けたネットワーク作り

公立豊岡病院　看護部
岡坂美帆, 桂純子, 東森優子, 津田恵
第 23 回日本クリニカルパス学会学術集会
2023 年 11 月 10 日～11 日　於：埼玉県さいたま市

講　　演

診 療 科	演 者 名	題　　名	講演会名	公演日
総合診療科	森　美砂	当院でのVEN＋AZAの使用経験および血液疾患診療の実情	血液腫瘍を語る若手医師の会 (Web)	令和6年1月18日
	岡本　明日香	CKD診療における高尿酸血症治療について	持田製薬株式会社社内研修会 (Web)	令和6年1月31日
内分泌・糖尿病内科	岸本　一郎	Key Wordsから考えるCKD重症化予防 in Diabetes	Improve Knowledge Seminar (Web)	令和6年2月28日
脳神経内科	横手　明義	日常にひそむてんかん	Brain seminar in Tajima (Web配信)	令和5年10月18日
	横手　明義	神経内科的救急疾患について	救命救急 てんかん Web Seminar in 但馬	令和6年3月4日
呼吸器内科	中治　仁志	但馬のCOPD診療について考える	Respiratory Meeting in Tajima (豊岡市)	令和5年5月31日
	三好　琴子	Ⅳ期非小細胞肺癌の治療戦略	Im-AE Management Seminar　2023	令和5年11月20日
消化器科	宮垣　亜紀	明日から使える、便秘薬を使い分けるコツ	慢性便秘WEBセミナー (Web配信)	令和5年5月15日
	宮垣　亜紀	地域で炎症性腸疾患を診るということ	田辺三菱製薬株式会社社内研修会 (豊岡市)	令和5年6月8日
	山田　貴裕	当院における炎症性腸疾患の治療の実際	自己免疫疾患診療を考える会	令和5年11月29日
循環器内科	矢坂　義則	心不全治療においてSGLT2阻害薬に期待すること	興和株式会社社内研修会 (豊岡市)	令和5年12月20日
	矢坂　義則	残存リスクを再考する	但馬内科医会学術講演会 (豊岡市)	令和6年2月17日
精神科	畑　京佑	うつ病の薬物治療とブレクスピプラゾール	Otsuka Web Seminar (Web)	令和6年2月2日
	三木　寛隆	心の健康と安心できる地域連携 いつまでも安心して暮らすには	心の健康と安心できる地域連携 いつまでも安心して暮らすには (豊岡市)	令和6年3月2日
小児科	藤林　洋美	発達特性と困りごと	発達が気になるこどもへの支援を考える (豊岡市)	令和5年11月18日
	港　敏則	こどもの心に寄り添う支援	発達が気になるこどもへの支援を考える (豊岡市)	令和5年11月18日
	山田　博之	神経発達症を併存した小児てんかん患者の診療の実際	てんかんカンファレンスセミナーin但馬 (豊岡市)	令和5年11月10日

脳神経外科	中井　友昭	遅発性脳血管攣縮の管理とピヴラッツの使用経験	西神 SAH Expert　Meeting (豊岡市)	令和5年4月19日
	中井　友昭	グラゾセンタンにおけるSAH術後管理	Hyogo SAH Network Expert Meeting (Web配信)	令和5年10月20日
皮膚科	秋山　創	アトピー性皮膚炎関連	但馬皮膚疾患病診連携講演会	令和5年11月30日
	秋山　創	帯状疱疹の診断・治療について	自己免疫疾患診療を考える会	令和5年11月29日
	秋山　創	当院におけるPAH治療について	日本新薬株式会社社内研修会 (豊岡市)	令和6年2月20日
産婦人科	田中　美柚	卵巣癌診療の実際を学ぶ	中外製薬株式会社社内研修会 (豊岡市)	令和5年12月25日
眼科	中西　秀雄	緑内障診療における私なりのOCTの使い方	KaNGUの会	令和6年3月6日
救急集中治療科	永嶋　太	プレホスピタルにおけるけいれん時の対応	てんかんカンファレンスセミナーin但馬 (豊岡市)	令和5年11月10日
	永嶋　太	救急医学の診断と治療	第一三共株式会社社内研修会 (Web)	令和6年2月5日
	永嶋　太	ECPRによる転帰改善を目指して	但馬メディカルフォーラム (Web)	令和6年2月20日
看護部	藤本　裕子	感染症、感染対策の基礎と家庭訪問での感染対策	但馬圏域介護職員向け感染症対策研修会(豊岡市)	令和5年9月28日
薬剤部	木瀬　大輔	抗がん剤副作用を評価しよう!!	但馬薬薬連携実務研修会	令和5年11月18日
	辻井　聡容	地域医療チームとの連携を意識した薬剤師活動	姶良地区薬剤師研修会	令和5年12月7日
	木瀬　大輔	分子標的薬の副作用対策、免疫チェックポイント阻害薬の副作用対策（irAE）	薬剤師連携推進研修会 (神戸市)	令和6年2月23日
リハビリテーション技術科	井垣　誠	病期別に考える糖尿病患者の理学療法評価と介入方法	鳥取県理学療法士会研修会 (米子市)	令和6年1月21日

資　料

公立豊岡病院紀要投稿規定

1）本紀要は公立豊岡病院（本院）の職員およびその関係者の研究業績等を掲載する機関紙（電子媒体）で年１回発行します。

2）本紀要に掲載する内容は次の通りとします。

①研究論文 （総説、原著、症例報告等。但し他誌に発表されていない論文に限ります。なお、学会、研究会での発表はこの限りではありません。）

②研究業績（原著論文、総説・解説、著書および学会・研究会発表。但し、本院に関係した業績に限ります。）

③講演会、集談会等の学術活動の業績

④視察、研修講習会等の報告、後記

⑤その他編集委員が適当と認めたもの

3）原稿は次の要領で記載してください。

①研究論文は和文または英文とします。

(a)論文執筆にあたっては論文執筆要領を参照してください。

(b)著者校正は誤植の訂正にとどめ、内容の改変はしないでください。

②学会、研究会の発表業績は発表抄録を収載します。他に演題名、所属、氏名、学会研究会名、発表月日を付記してください。

③研究業績については和文の場合８００字程度、英文の場合４００語程度の抄録を収載します。他に表題、所属、著者名、掲載誌名または著書名、発行所、巻（号）、頁（始頁-終頁）、発行年（西暦）を付記してください。

④講演会、研修会等の業績については演題名、所属、氏名、会名、発表年月日の順に記載してください。

⑤視察、研修講習会等の報告等は論文執筆要領１〕に準じてください。

4）本紀要の掲載研究業績の区切りは本誌発行の前年度（前年４月１日より発行年３月 31 日まで）とし、原稿の締切は８月末日とします。なお、原著論文、著書等においては発行年月日をもって業績日とします。

5）本紀要の原稿は編集委員会事務局へ提出してください。なお、不明点、疑問点がありましたら、事務局にお尋ねください。

公立豊岡病院紀要編集委員会

事務局：〒668-8501　兵庫県豊岡市戸牧 1094

公立豊岡病院　教育研修課

TEL:0796-22-6111　内線 2217

公立豊岡病院紀要論文執筆要領

1〕和文論文、英文論文とも、ワープロまたはパソコンの編集ソフトを使用して作成したものを、A4判の用紙に片面印刷して提出する。書式などは特に問わないが、ごく標準的な形式であることが望ましい。

文字数は、和文論文で約5,000字、英文論文で2,500語を超えない程度とし、図表・写真は合計で12枚程度とする。

なお、テキストデータを保存した記憶媒体を同時に提出する。また、画像データについては編集ソフトで貼り込んだものの他に、オリジナルのデータを添付することが望ましい。ポジフィルム、プリントも受け付ける。

2〕論文の構成は表題、所属、著者名、要旨、キーワードおよび本文とする。本文は緒言、症例、方法、成績、考察、結語および文献とし、図表を付ける。

なお、これらの項目のうち適宜省略しても構わない。

3〕表題は内容を簡潔、的確に明示するものとし、略語はなるべく用いない。

4〕要旨は、和文では400字以内、英文では200語以内とし、内容を的確に表現する。

5〕キーワードは英語で5個以内とし、Index Medicusなどで用いられている用語が望ましい。また、用語の先頭の文字は大文字で記載する。

(例) Key Words : Echocardiogram, Acuteabdomen, Digoxin

6〕本分での人名はなるべく原語を用いる。略語を使うときは初出時に正式名を記し、( ) 内に記入した後に使用する。関連領域で周知の略語でも乱用は避ける。度量衡の単位はＣＧＳを、年号は西暦を、数字は算用数字を使用する。

7〕図、表、写真は和文の場合は図、表、写真、英文の場合はFig, Tab, Photoと記し、複数の場合には1,2,…を添え、必ず標題を付ける。また、必要ならば説明を添える。

なお、図、写真の説明は下に、表の場合は上に入れ、図表等の挿入箇所を本文の欄外に指定する。

8〕文献の記載は本文該当部の右肩に引用順に番号（引用番号）を片括弧で記し、本文最後の文献の項に整理して記す。

(a)著者名は2名までのときは併記、3名以上のときは筆頭者氏名、他とする。

(b)表題は必ず記載する。

(c)雑誌名は個々の雑誌で定めた略記に従い、省略のピリオドは打たない。

(d)頁は通巻頁により、最初と最後を併記する。

(e)文献記載の書式は、雑誌の場合、引用番号、著者名、表題、雑誌名、巻（号）、頁（始頁—終頁）、発行年（西暦）の順に、また、単行本の場合は引用番号、著者名、表題、書名（編集名）、巻数、版数、出版社名、発行年（西暦）、頁（始頁－終頁）の順に記載し、以下の例示に従う。

［雑誌］

1) 長尾光、河村慧四郎：心筋症と心臓突然死.
最新医学 46(5) ：1067—1071, 1991

2) 北村正次、他：早期胃癌の術後再発生形式および死亡原因の検討. 日消外会誌 24(12) ：2894—2899, 1991

3) Rawal N, Wattwil M : Respiratory Depression after Epidural Morphine-An Experimental and Clinical Study. Anesth Analg 63(1) ：8—14, 1984

4) Lin C et al : The internal septal echocardiogram : Relationship to leftatrial volume change in normal and disease heart.
Am Heart J 107(3) ：519—525, 1984

［単行本］

5) 坂本恵子：ストーマケア　オストメートへの理解と援助. 第1版、医学書院、1985、p108－133

6) 和田義郎：小児の蛋白代謝とその調節、新小児医学大系（小林登、他編）、第17巻Ａ（小児代謝病学Ⅰ）、第1刷、中山書店、1984、p241—253

7) loeb R : Aesthetic Surgery of the Eyelids, 1 st ed, Springer-Verlarg New York Inc, 1989, P49—52

8) Grossman M et al:Diagnostic Needle Aspiration of the Pancreas.
Gastroenterology (Berk JE et al eds), Vo16, 4th ed, Saunders Company, 1985, p3962—3970

9〕本紀要の論文は
国立国会図書館（ISSN)、医学中央雑誌、JOISのデータベースに登録されますので、和文論文では英文の、英文論文では和文の抄録を付けることを歓迎します。抄録は表題、著者名、所属、キーワード（５語以内）および抄録分（和文：400字以内、英文：200語以内）で構成し、抄録文では目的、結果および結論を明示する。

編 集 後 記

第 36 号公立豊岡病院紀要をお届けいたします。

本号も、働き方改革という大きな転換期にありながら、皆で力を合わせて創り上げることができました。ご尽力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

働き方改革の推進により、私たちの業務環境や日常の働き方にもさまざまな変化が生まれています。コロナ禍を経て、学会や研修会はリモートと対面を組み合わせたハイブリッド形式が定着しつつあります。この新たな形態は、時間や場所にとらわれない柔軟な働き方を可能にするという点で、現在進められている働き方改革とも深くつながっているように感じます。リモート・対面問わず、多くの方々が学会や研修の場に参加されるようになりました。この号ではそのような中で研究論文 1 篇、他誌に掲載された 10 篇の論文、多数の学会発表を紹介することができました。

皆様の学術的に、情熱的にいろいろ取り組まれておられることに感動いたします。

公立豊岡病院紀要は、これからも地域の人々により良い医療を提供するため、学術的に向上する場所となっていきたいと考えています。

ご投稿いただきました皆様，また，研究紀要運営委員・職員の方々に感謝申し上げます。これからも「公立豊岡病院紀要」は続きます。公立豊岡病院の輝かしい未来を創るために、そして、我々自身のすばらしい未来を創るために、来年度も「紀要」に投稿をお願いします。

公立豊岡病院紀要編集委員会
委員長　松島　一士

紀 要 編 集 委 員 会

委 員 長

松島　一士（図書学術室長）

委　　員

岸本　一郎（病院長補佐）
石田　明彦（循環器内科）
稲葉　京子（看護部）
久田　昭子（看護部）
今井　清隆（薬剤部）
後藤　孝文　検査技術科）
髙階　優太（リハビリテーション技術科）
坂田　康則（教育研修課）

事 務 局

京　大地（教育研修課）